

二月十四日について、それぞれ思うところはあるだろう。

お菓子会社の策略だと斜はすに構えてみたりか、リア充のリア充によるリア充のためのイベントだと僻ひがんでみたりとか、「え？　なんかあつたっけ？　ああ、バレンタインね。すっかり忘れてたわー」と嘯うそぶいてみたりとか、各々おのおのでスタンスも違うだろう。

まったくもって——嘆なげかわしい。

こんなものは楽しんだ者勝ち。どうせ同じ阿保あほなのだから、気持ち良く踊らされていればいい。

別にこれは俺がチョコレートを貰もらえる、言わば『勝ち組』であるが故ゆえの余裕などではない。

甘いもの好きだからチョコをもらえるのは嬉しいというだけで、けして女の子から貰える事を特別に嬉しいとか思っている訳ではない。

チョコに貴賤きせんなし。

自分で買った十円のチロルチョコだろうが、女の子が自分のために手作りしてくれたハート型のチョコだろうが、カカオマスと砂糖とココアバターと粉乳かたまりの塊かたまりに違いはない。どちらも等しく美味うまいい。

ただまあ、自分を慕したってくれる女の子から貰ったチョコであるなら、より美味しく感じるであろう事は否定しない。

うん。別に、バレンタインのチョコは女の子から貰ってなんぼだよね——とか言いたい訳ではないのだ。

もし、そんな風に受け取られたとしたなら——

いや、メンゴメンゴ。

11 戦目

『チョコレートは背徳感と共に』

俺の名前は橘アサト。ゾイエス学園高等部の三年生だ。

今日は二月十四日。全国的にバレンタイン・デーである。

学園ものの漫画やアニメやラノベであれば、外す事の出来ないビッグイベントだが、現実の学園生活においてはドラマチックな事など起こらない。学園内の空気が変わるとか、男子が妙にソワソワするような事もない。女子にしても、いわゆる『友チョコ』のやり取りをするだけで、男子に渡している気配は皆無だ。

女子が意中の男子に告白としてチョコレートを渡すという意味合いは、完全に形骸化していると言っている。

まあ、現実などそんなものだろう。

十代の男子は確かに馬鹿だが、『ひよっとしたら貰えるかも』などと期待するほどは馬鹿じゃない。ほとんどの男子は、その程度には己を弁えている。馬鹿な部分があるとすれば、弁えた上でモテる努力をしない点だろう。

そんな訳で、現実の二月十四日というのは、単なる二月十三日と二月十五日に挟まれた平日でしかない。

ただ、俺の場合はチョコを貰っている。妹と、同居している三姉妹からだ。

それ自体は嬉しいのだが、登校前の慌ただしい時間帯に加え、俺は極度の低血圧のため、朝はまったく頭が働かない。チョコを貰った記憶はあるが、詳細をあまり覚えていない。

ついでに言うと、空気がやや殺伐とすらしている。

なので、『いかにもバレンタイン！』みたいな雰囲気は味わっていない。

前述したように、俺だって己を弁えているので、家の外で告白としてのチョコを貰えるなんて思っていない。むしろ、これ以上を望むのは贅沢というか、罰が当たるだろう。

しかし、だからといって、そういった憧れがないかと問われれば――否だ。

そんな美少女恋愛ゲームみたいなイベント、一度くらいは体験してみたい。誰だって願望くらいはあるだろう。

そんな事を頭の片隅で思いつつ、一人で下校していると――

「――あ、お兄さん」

と、家まで目と鼻の先で声を掛けられた。控えめだが良く通る、落ち着いた声音。俺の事を『お兄さん』と呼ぶのは一人しかない。

「ツバキ。一人か？」

俺を呼んだのは予想通り、高千穂ツバキだった。

ゾイエス学園初等部の五年生。俺や妹達とも付き合いのある少女である。てつきり、今日は彼女等と一緒にのだと思っていたが、違ったらしい。

「はい。えーっと……今日はお兄さんを待ち伏せしていました」

そう言うと、ツバキはいつも通りの澄まし顔——ではなく、少しはにかんだ表情を浮かべた。心なしか、緊張しているようにも見える。

小学生とは思えない大人びた性格のツバキには珍しい。

「俺、何か待ち伏せされるような事したか？」

「あ、待ち伏せは言葉が悪かったですね。お待ちしていました——です」

ふふ——と、品良く笑うツバキ。

正直、可愛い。

照れ隠しなのだろうが、これは普通の小学五年生の立ち居振る舞いではないだろう。まさか、今時の小学生はこのくらい大人びているのが普通ではあるまい。

出会った頃からそうだが、言葉遣いや精神面——一部の身体的特徴も——が、明らかに小学生としては規格外の少女である。

見た目は普通——一部以下略——な分、それはより大きな差異となる。

「そうか。立ち話もなんだし、上がってくか？」

小学生の女の子にドギマギしてしまった事を悟られまいと、努めて平静を装う。

それと同時に、自分一人しかない家に女の子を招いた事を、深読みされはしないかと自分の迂闊さを呪った。相手が普通の小学生なら、そんな事は思わないだろうが、ツバキならこの手の発言が男女間であれば何を意味するか考えるかもしれない。

「いや、別にやましい事は何も——」

「え？」

持ち前のネガティブさで先回りして言い訳をしようとする、ツバキはきよとんと小首を傾げた。小鳥のような仕草が実に可愛い。

「あ……なんでもない」

「お邪魔させてももらいます。その、往来ではちょっと恥ずかしいですし」

ツバキは俺の不審な発言を気にする様子もなく、むしろ嬉しそうにそう言ってくれた。なので、俺も何が恥ずかしいのかは訊かなかった。

ツバキをリビングに上げ、お茶の用意をして戻ると、彼女は先ほどまでと少し装いが違っていた。

まず、兎の耳が付いたカチューシャだ。

ツバキのウサミミ自体は見慣れているが、あれは『看板娘』の正装の一部らしく、普段

は当然外はずしている。今日は学校帰りなので、先ほどまでウサミミはなかったのだが、それが今はある。鞆かぼんの中に入れていたのだろう。

「なんか、制服姿でウサミミがあるのは新鮮だな」

コーヒーが入ったカップをツバキの前に置きながら言う。タオエンが淹いれたものと比べるのは勘弁してほしい。

「カナコさんから、お兄さんはネコミミがお好きだと伺うかがったので、付けた方が良かったかと思ひまして」

律儀りちぎにコーヒーの礼を言ってから、ツバキはそう答えた。

あの妹はそんな余計な事を教えたのか……だが、結果的に良い仕事をしてくれた。制服でウサミミのツバキという、珍しいものが見られたのだから。

「あの、ネコミミの方が良かったですか？ 私、これしか持っていないくて……」

申し訳なきように言うツバキ。あざとさゼロの、計算ではない自然な上目遣いで。かなり、可愛い。

「いや、全然。俺、ケモミミ全般ぜんぱん好きだし」

小学五年生女子に向かって何を宣のたまっているのかと正気を疑いたくなるが、乱心などしていない。すべて本心だ。

……それはそれで、どうかと思わないでもないが。

「そうなんです。ね。なら、良かったです」

純粹無垢で、心底ほっとしたようなツバキの表情に、内心で見惚みとれる。断わっておくが、俺に幼女趣味はない。

なにより、ツバキと接していると、相手が小学生だという事を忘れてしまう。

だからこそかもしれない。純粹にツバキを、女の子として可愛らしいと感じてしまう。

ひよっとしたら俺も、彼女が看板娘として働いている店の客と同じく、ツバキの幼い容姿と大人びた内面ギャンブの差異に、背徳的な魅力を感じてしまっているのかもしれない。

……そこは深く考えないでおう。

「あ……恥ずかしいって言ってたのは、そのウサミミの事だったのか？」

見惚れてしまっていたのを悟られまいと、なんとか言葉を探す。ネコミミもそうだが、一般的には人目を憚はばからずに付けて出歩くアイテムではない。

「あ、いえ。それもそうではあるんですけど……今日は、これをお渡ししたくて」

そう言って、鞆かぼんの中から平たい箱を取り出すツバキ。女の子の掌てのひらにもギリギリ載るくらいのサイズである。今日が何の日か考えれば、中身は予想がつく。

予想外だったのは、箱の中身——やはりチョコだった——の端を口に咥くわえ、ツバキが控ひか

えめに「んっ」と差し出してきた事だった……マジか。

「えつと……」

「あの、嫌でしたか？ カナコさんから、お兄さんはこういうのも好きだと……」

啜くわえていたチョコを離し、ツバキはまた申し訳なきように言った。なるほど、カナコの入れ知恵か。となると今日、俺が一人で帰る事になったのも彼女の仕業だろう。恐らく、タオエンを抱き込んでヤミヒメとペアトリーチエを俺から引き離したのだ。ひよつとする
と全員同意で、唯一同居ゆいどうしてないツバキのためにお膳立てをしてやった可能性もある。

それはそれとして、俺は別に口移しが好きな訳ではない。そういう願望がないとは言わないが、あくまでちよつと良いなと思う程度であつて、決して願望とかではない。

「……お兄さん？」

不安そうな表情で、また小首を傾かしげるツバキ。

反則的に可愛い。

「いや、そうじゃなくて……そう、眼鏡めがね！」

「眼鏡、ですか？」

「ああ。せっかくだから、眼鏡もかけたままの方が新鮮で良いかなと」

きよんとした様子のツバキに、そんなリクエストをしてみる。

そう。ツバキは俺がお茶の準備をしている間に、それまでかけていた眼鏡を外はずしていたのだ。

「判りました」

と、ツバキは怪訝けげんな顔ひとつせず、俺の要望に応えてくれた。

苦し紛まぎれに言ったただだったが、これは予想外の効果だった。元々、品行方正な優等生キャラだけあつて、眼鏡との相性が抜群ばつぐんに良い。普段あまり、制服姿の彼女と接する機会がないため、眼鏡をかけている姿もあまり見ない。看板娘としての仕事中は基本的にコンパクトなのだ。それが今は制服姿で眼鏡をかけ、ウサミミも装備している。

ヤバい、可愛い。

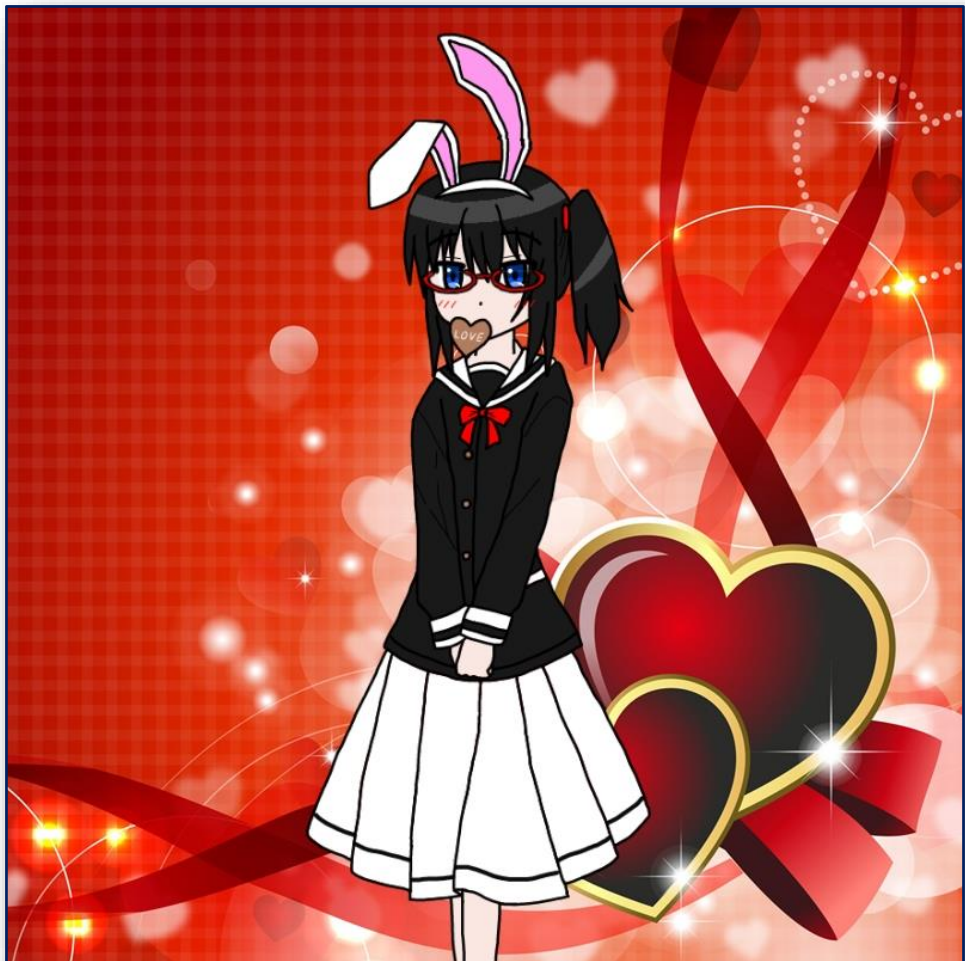
これは新鮮かつ、希少レア度で言えばSレア級クラスと言ってもいいのではなからうか。ソシヤゲのイベント限定ガチャなら課金するかもしれない。

「では改めて——日頃の感謝の気持ちです。受け取ってください」

そう言うつとツバキは再びチョコの端を啜はしえ、控ひかえめに差し出してくる。

親鳥から餌えさを与えられる雛ひなのようで可愛い。

さすがに恥はずかしいのだろう。ツバキの頬ほおはほんのりと紅潮べにぢやうしていて、バレンタインの意味を理解してない無邪気な子供のノリではないのだと気付かされる。



やはりツバキは規格外だ。

少なくとも、普通の小学五年生の女の子として見る事は出来ない。

それは都合の良い解釈や理論武装ではなく、単純に彼女に対して失礼だろう。

だから俺は、差し出されたチョコを受け取った。

どうやって受け取ったかについては……うん、俺の胸に仕舞っておこう。

ただ、間近に見るツバキの表情は、どこか恍惚こうごうとしており、やはり小学五年生とは思えぬ色香を感じさせた。

改めて思う——ツバキという少女から感じる背徳感はいとくかんは尋常じんじょうじゃない。

彼女から貰もらったチョコすら、どこか背徳的な味あじがした。

ちなみに、あくまでチョコの味の話なので、深読みふかよみはしないでほしい。

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』十一戦目をお届け致します。

ギャップ（背徳感）担当の看板娘・ツバキですが、今回から新たにメガネっ娘属性が追加されました。戯たわむれに眼鏡を描いてみただけなんですけど、「あ、ええやん……」とツボってしまっただがためです。

初等部の制服は悩みましたが、高等部がブレザーで、中等部がセーラーなので、セーラーっぽいブレザーとなりました。初等部はツバキしかいないので、ツバキならブレザーだろうという完全に走った結果です。

制服姿のイラストは、残すはカナコのみ……制服って良いよね！

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。大人びていて、しかも隠れ巨乳という、正統派ロリが好きな方からすれば邪道——いっそ神への反逆ですらあるでしょう。でも、伝えたい。

背徳的なロリっ娘って萌えるじゃない!?

異論や苦情は受け付けません。あくまで個人的な趣味・嗜好の問題なので。

2018/2/12 流遠亜沙

アンケートに答える

『そーりよくせんっ！』ページに戻る